

清沢満之畢生の願い

— 浄土真宗の学場 —

延塚 知道

はじめに

清沢満之(一八六三—一九〇二)は、一九〇一(明治三十四)年十月十三日、東京巢鴨の地に移転開校した真宗大学の開校式で、次のように述べている。

本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。

この「開校の辞」は文部大臣や明治政府の高官、帝国大学総長や各私立学校々長等の来賓を前にして述べたものであるから、具体的な「他の学校とは異なる」る点が、満之の念頭にはあったと思われる。もちろん大学としての具体的な違いは、「浄土真宗の学場」と言うように、死をも超える宗教的真理の学それ自体に由来する。国家的規模の大学として、その学問の精神や方法や質において、世間の学とは異なる出世間の学に、その違いの根柢があるのである。しかし、その出世間と世間の学との違いは、当然当時の状況の中で、大学として現実的な異なりを表現していたと思われる。満之の出世間の学の特質や、当時の同志社の様子は、拙稿「真宗大学の特質」(『親鸞教学』六十号)を見て頂けば幸である。この発表では、真宗大学開校当時の慶応義塾の動向を尋ね、真宗大学との違いを浮き彫りにしたいと意図するものである。

一 福沢諭吉の学精神

明治の日本は、近代国家として欧米の列国に伍していくため、富国強兵殖産興業を国策とする。その一翼を教育の面から担うのが福沢諭吉である。『学問のすすめ』には、

実なき学問は先ず次にし、専ら勤むべきは人間普通日用に近き実学なり。

と言ひ、それまでの漢学や儒学をしりぞけ、実証的実用的な科学を重んじるのである。この実学によって、

士農工商各々その分を尽し銘々の家業を営み、身も独立し家も独立し天下国家も独立すべきなり。

と述べ「一身独立し、一国独立す」と主張するのである。

この独立と同時に、福沢が慶応義塾に期待したことは、「独立自尊」という塾の建学の精神が示すように、自重、自尊ということである。『福翁自伝』に、

元来私の教育主義は自然の原則に重きをおいて、数と理とこの二つのものを本にして、人間万事有形の経営はすべてソレカラ割出して行きたい。また一方道德論においては、(中略)一身を高尚至極にし、いわゆる独立の点に安心するようにしたいものだ。

とある。同じく『福翁自伝』の最後には、

私の生涯の中に出来てみたいと思うところは、全国男女の氣品を次第々々に高尚に導いて真実文明の名に恥ずかしくないうようにすること

と言うのである。欧米の人々と対等につき合っていくには、学問による独立と道德による自尊、この「独立自尊」が福沢諭吉の生

涯を貫ぬく願いであり、慶応義塾の塾風を築き上げていくことともなるのである。

しかし明治国家の教育政策は、一八九〇（明治二十三）年に發布された「教育勅語」体制下にあり、天皇制イデオロギーを国民に浸透させるための強力な意図に貫かれたものであった。この上からの一国の教育ということからすれば、当時の私学は国家の厳しい統制の中にあつて、下からの一人の教育に力をそそいだのである。

二 「修身要領」起草

一八九八（明治三十一）年に、義塾は、幼稚舎六年、普通部五年、大学部五年の教育課程を一貫した体系の下に整理をし直し、大学部を義塾教育の本幹とする。しかしこの年の十月に社頭の福沢は、脳出血で倒れる。幸いまもなく回復するが、二年四ヶ月後に脳出血の再発で亡くなるまでの短かい間に、福沢の生涯を貫ぬいた道徳教育の集大成ともいふべき「修身要領」を作るのである。その意図は、自分が元氣な間に義塾一貫教育の建学の精神を文章化してまとめておくこと。同時にそれを、社会へ道徳運動として普及させること、にあった。福沢は、長男一太郎や前塾長小幡篤次郎をはじめ六名に、明治三十二年の暮、次のような趣旨を述べた。「今の日本は、古い道徳（儒教を中心とする道徳）はすたれ、新道徳は表われていない。だから天下をあけて、修身処世の方向に迷っている。道徳は時代によつて変わるものだから永久の事は別にして、今の社会の方向を定めるべき修身処世の綱領を、自分の思想を基にして作りたい。」

明治二十八年、日清戦争が終ると、国家を至上と見る戦時中の

考えに対する反動的な風潮が高まる。その風潮の中から、世界主義、共和主義、個人主義、その他色々な思想がこの時期、にわかに台頭し、保守派はこれらに対抗する形で、思想界は混迷をきわめていた。さらにこの時期、明治二十七年から三十年にかけて、日本と諸外国との不平等条約の改正が、関係十五ヶ国との間で行われる。明治三十二年の七月から、治外法権が撤廃され、外国人の内地雑居を認めることとなるのである。この内地雑居は、宗教、教育、産業、政治等の、あらゆる分野における事実上の日本の開国にあたるため、当時の日本を揺るがす大きな出来事であった。

明治三十二年に発行された、横山源之助著『内地雑居後の日本』には、日本が様々な面で近代国家としての真価が問われようとしている様子や、その狼狽ぶりが、見事に表わされている。日清戦争後の思想の混迷やこの内地雑居、さらにそれを迎える日本人の、近代人としてお粗末な不道徳性等が、福沢をして、慶応義塾の建学の精神である「修身要領」の製作に向かわせる外的な事情でもあった。

三 独立自尊

今では有名な義塾の建学の精神を表わす「独立自尊」という言葉も、この「修身要領」製作の過程で成語されたものである。福沢の精神を一言で表わす言葉が考えられ、この語を中心に綱領が作られたのである。綱領は何度も書き直され、福沢の入念な校閲を経て、明治三十三年二月十一日の紀元節の日に完成される。同二十四日の三田演説会で発表され、二月二十五日付の『時事新報』にその全文が掲載されるのである。その後紙上では、毎日のようにこの「修身要領」の説明がくり返され、国民への啓発が展

開されるのである。

福沢は、これの宣伝普及のために著書の収益を投じて、全国各地に遊説隊を派遣する。この新道德運動は、この時期大きな力を持つて、西村茂樹の主唱する日本講道会の事業と共に、その性格こそ違え、明治期の道德運動の双璧といわれるまでになるのである。福沢は、明治三十四年二月三日、真宗大学が開校される八ヶ月前にこの世を去る。しかし真宗大学開校当時は、この運動が最も盛んに行われ、日露戦争の頃まで続けられるのである。

「修身要領」は、当時の日本の状況から考えれば大変進歩的な内容である。しかし、この綱領の第一条、第二条、さらには次に掲げる第三条に、

自ら勞して自ら食ふは人生独立の本源なり。独立自尊の人は自勞自活の人たらざる可らず。

と言われるように、福沢の言う、「独立自尊」とは、経済的な独立をその本源とするのである。福沢のこの考え方は生涯を貫ぬき、この綱領に限られたものではない。福沢の思想から早くそれを見抜いていた内村鑑三は、彼を「拜金宗」と批難するくらいである。いうまでもなく清沢満之のいう独立とは意味が違ふ。満之は、

世間の学校は、固よりパンと名誉とを求むる者のために設く。独り宗教の学校はパンのために悩まされざる底の修養を得せしめんために建設す。一は世間的にして、一は出世間的なり。

と言う。福沢の「独立自尊」は、ここである世間的な独立である。それに対して出世間的な独立は、「人心の至奥より出づる至盛の要求」としてある宗教心を、本当に満足せしむるものである。その満足とは宗教心が、死をも超える宗教的真理を尋ね当てた時だけである。その宗教的真理に依って生きる者を「独尊子」と満之

は言うのである。「独立自尊」と「独尊子」、よく似た言葉であるが、その学の精神や方法や質において、世間の学と出世間の学との違いを持つのである。

註

清沢満之の学の精神や方法や質については、出世間の学と世間の学として、拙稿「真宗大学の特質」(『親鸞教学』六十号)ですでに尋ねたことであるから、この発表では、あえて言及しなかった。お読み頂ければ幸である。

(本学助教授 真宗学)